

《第4回日中韓ユースフォーラムレポート》 国境を越えた新しい出会いと喜び ～未来への架け橋となる若者たち～



第4回目となった日中韓フォーラムは、8月16日(木)から21日(火)まで、5日間にわたって韓国で開催されました。総勢70名に及ぶ学生が、中国・韓国・日本から参加しました。ソウル近郊の国際青少年センター及び天安市の国立中央青少年修練院にて、活発な討論や、様々な趣向を凝らした交流が行われました。

日本からは国際IC日本協会理事の高橋衛氏(ドイツ証券常勤監査役)、同じく理事である高橋久子氏、通訳兼コーディネーターを務めてくださった金光明氏(ブラボジャパン代表取締役)に加え、すでに韓国に留学中の2名を含む、18名の学生が参加しました。今回のテーマは、「未来社会のための東北アジアの経済協力」でした。3つのグループに分

かれて、各グループで

1. 自由貿易拡大と国際化
2. 持続可能な成長のための東北アジアの経済協力
3. 将来の経済協力のための青年の役割

について、活発かつ和やかなディスカッションが続けられました。

青山学院大学、桜美林大学、慶應義塾大学、上智大学、明治大学、明星大学、立教大学、早稲田大学からの参加者18名は、中国や韓国からの学生と討論してどんな事を学んだのでしょうか。また、食事やふれあいタイム、文化交流やソウル近郊でのホームステイと盛り沢山のプログラムの中で何を学んだのでしょうか。このフォーラムの参加者の体験をお伝えします。

■主な内容

◇第4回日中韓ユースフォーラムレポート……………	1-5
◇スイス・コー世界大会レポート……………	6-10
◇IC ニュース……………	11-12

日本の果すべき役割

伊藤 優太（青山学院大学国際政治経済学部 2 年）

私は、今回第 4 回東北アジア青年フォーラムに参加し、多くの重要なことを学びました。第一に、グループ別討論や先生方の講演、各国の事例発表や自動車工場見学を通して感じたことは、今回のテーマであった東北アジア地域における経済協力の重要性です。日中韓の 3 か国は、異なる政治体制及び経済状況を抱えています。環境問題、人権問題、雇用と格差の問題を始め、共同で対処していくべき問題が非常に多いのです。各国の政府、企業、自治体、NGO、個人などが、それぞれの役割を果たし、協力して東北アジア地域の安定的な成長を目指すことによって、地域の平和に積極的に貢献していくことが求められているということを強く実感しました。

第二に、各国間において友好関係を築き上げることの重要性です。私は、中国や韓国の学生が日本の歴史認識問題や領土問題について鋭く突っ込んで来るのではないかとということを少なからず心配していましたが、個人的にお互いを知り仲良くなるにつれ、その心配は全く消えました。むしろ韓国・中国の若者が非常に熱心に世界を捉え、また愛国心教育やメディアに伴う偏見にとらわれることなく日中韓の現

状理解に努めていることに、深く感動しました。また、日中韓の言語は発音が似ている場合が多く、特に日本語と韓国語は文法も似ているため、韓国語や中国語を発話することが楽しくて、親近感と一体感を感じることができました。これは英語圏の人と英語を話すときには得られない感動でした。

第三に、近代的な自動車工場を見学したり、中国の経済成長率について討論したりするなかで、日本の若者がどうやって日本をリードしていけばよいのかということを考えました。日本は先進国となったのだから、後は野となれ山となれ、ということでは困ります。日本の果たしていくべき役割というのは日本の為だけでなく世界にとっても大きいものであり、例えば省エネ技術の提供や環境技術の拡充などを通して、様々な貢献ができるはずです。柔軟な思考能力と積極的な行動力を使って、社会を変えて行く原動力になっていくことが期待されているのです。そのために自分ができることは何か、ということ深く考えた非常に有意義な旅であったと感じています。

偏見から自由になって

～隣人を理解し、自分を発見する～

今回初めてこのフォーラムに参加しアジアの国々の交友関係の重要性を知ると共に、自分の中での小さな偏見をなくし、各国の友情をこれからも維持していくことが私の課題であると、このフォーラムで出会った人々を通して強く感じました。

16 日から 21 日の短い韓国訪問の中、私は多くの人々と出会い話し合うことで自分自身の意識、精神的な面が驚くほど変わったと思います。それは、今まで私は在日コリアンとして生きてきたものの、韓国・日本と両国に対して中途半端であり、本当の

尹 明愛（上智大学総合人間科学部 1 年）

意味で自己を見つめてこなかったからです。確かに、今まで自己を見つめ考えることは幾度もありました。しかし、それは小さい世界での物の見方であり、そこから見出した答えも本当に合っているのか、自分には何ができるのかと不安に思うことばかりでした。そのため、今回のこのフォーラムの参加にあたっては在日コリアンである自分を確立し、自分の中の偏見をなくそうと強く心に決めていました。

しかし、フォーラムに参加して驚いたのが、各国の国民性はあるものの、友人として接する全ての人

の姿には偏見もなく、互いを良く知ろうという姿勢が見えたことです。在日コリアンである私に対しても日本・韓国関係なしに、尹明愛という一人の人間として見てくれ、在日コリアンとして接し理解してくれたのです。私はその時自分の考えの小ささを知りました。今まで在日コリアンである自分の存在を明らかにするために考え行動してきましたが、それは大きな問題ではなかったということです。大切なのは自分が何者かばかりを追究し、他者に理解してもらうことではなく、相手を理解して心から相手を思いやることなのです。そこから本当の自分が見えてくると、私は感じました。

確かに、自分が何者かを考えるのは大切なことですが、これまでの私はそれにとらわれすぎて、相手は何者であるかは考えてきませんでした。そして、私はその考えから相手に偏見を持って接していたのだと気づきました。その偏見は自分の悩みであり、また、自分の存在への問いかけでもあったのです。そのことを、今回のフォーラムで気づき相手と接しながら共に考えていこうとすることができました。悩みであるからこそ相手を思いやりをもって理解し、そこから自己を見出していくことが大切であり、そこに、何にもとらわれない本当の自分が見えてく

感動の涙

フォーラムのメインである、テーマ毎に行われる議論やその他の交流の時間を通して、私が今までイメージしていた、いわば一国利益主義といえるような自国の利益だけを追求すればよいという考え方や、他国に対する排他的なイメージは払拭され、長いビジョンで国家像を描いたときに、日中韓といった国家を超えた広い地域間での友好関係を築いていった方が、どの国にとってもより建設的であるという価値観を創り出すことができました。こういった価値観は、日本にいてニュースや本などから得た知識だけではなかなか得難いと思います。

最後の夜、フォーラムの参加者が全員集まって皆で楽しそうに語り、笑い、ふざけあっているとき、



韓国の学生と友情を深める日本の学生達(左・尹明愛さん、右・猪鼻さん)

るのではないだろうか。そして、そこから真の日中韓の相互理解をより深く素晴らしいものに発展させていけるものがあるのだと、私は考えました。

このように、今回の日中韓フォーラムは私の意識、精神面に大きな影響を与えてくれました。しかし、私達はこれで満足してはならないと思うのです。それは、今回出会った人々との関係を維持していつこそ、真の友情となり、国際理解につながっていくのだと考えるからです。

山崎 敏哉 (明星大学 人文学部 1年)

急になぜか感動で泣き出しそうになってしまいました。自分でもびっくりしましたが、こんなに仲良くなっているのに、どうして国家間ではぎこちない関係が続いてしまうのだろうか、もっともっと仲良くしていきたい！…そういった感情が自分の中に芽生えたからだと思います。私は将来教育者を目指しています。こういった経験を子どもたちに伝えることで、興味を持ってもらい、広い視野でものを捉えられるような人間になってほしいと思います。そのためには私自身ももっともっと様々なものを見聞きし、体験していかなければならないと思いました。

日中韓の壁をなくすために

今回のフォーラムを通して私は様々な面で多くの刺激を受け、自分自身を見つめ直す機会を得ることができました。そして夢のような5泊6日を振り返った今、本当にたくさんの方々に対して感謝の気持ちで一杯です。

初めの3日間は主にフォーラムの本題である討論・会議を行いました。“未来経済のための青少年の役割”という内容で話し合いを行った私達グループ3では、初めは互いに言葉の壁があり、なかなかスムーズに討論が進みませんでした。しかし互いにその壁を打ち破り相手を理解しあうことで素晴らしい結論まで導き出すことができました。

未来の経済協力の必要性和青少年の役割の重要性や経済協力の基盤を整えるために青少年がすべきことなどについて話し合いました。結論としては、「日中韓の各国家間の壁をなくすため各国の青少年が各国の文化と言語を学び合い、3国間の友好関係を築き、これからの東北アジア統合の中心となるような活動を推進する」ということを一つの提案とすることで合意しました。具体的には、①今回のフォーラム参加者は帰国後に各国の留学生達と共にグループ・ワーク (group work) を行う②グループ・ワークは、各国の言語習得、文化交流、討論等のために

[韓国側参加者]

大切な日々を振り返りながら

フォーラムが終わり、懐かしい韓国、中国、そして、日本の友人たちの顔が度々思い浮かびます。フォーラムの準備中は、3国の経済に関する事前調査や討論の構成にばかり気を使っていました。しかし、いざフォーラムが終わってみると、その時はそこまで深く考えていませんでしたが、国境を超え共に過ごした友人たちとの思い出が今でも私の心にずっと残っているのです。

金 歩美 (明治大学文学部2年)

定期的に行う③インターネット上にその活動内容を報告記載する④日中韓の交流の場の形成のためにその時に出た意見などを企画化し国に提出する、という計画です。これらは今後3国における交流の場を形成するきっかけをもたらし、また各国で集会や会議などをより活発に開催する力となるものと期待しています。

このようにグループ3では活動可能な具体的提案をすることができました。しかしこの素晴らしい具体案が提案のみで終わってしまわないためにも、各参加者が帰国後も互いに連絡を取り合い、実行していくことが何よりも重要なのだと思っています。



ユ・イエスル (ソウル大学経済学部)

韓国、中国、そして、日本。3国共に漢字を共通に使い、同じ東アジア文化圏に長い間属していたためか、共有できる部分がとても多くあると思います。たとえ、互いに海を隔てた地理的要因があり、韓国語、中国語、日本語といった異なる公用語を使うとしても、各国の言葉はとても似ていますし、文化的共通点も大きいのです。日本の友人の一人がく東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武を説明

しながら、私たちの3国間だけが理解できる内容であると私に話したのを思い出します。彼の話の聞きながら、3国が模索できる共通点について、もう一度考えることができました。

しかし、フォーラムを進行していくうちに共通点だけではなく、3国それぞれが持つ考えと文化の差を感じることもできました。同時に、3国が地理的に隣接する国家であるにもかかわらず、相互の実質的の違いを知ることが難しかったということも事実でした。中国の場合、経済は開放され市場経済の形態をなしてはいますが、政治的に共産主義であることから、日本や韓国に比べ国家主義的な色彩を濃くもっていると感じました。中国の友人たちは国家、社会に対する観念がとても明確であり、自国に対して強い自負心をもっていました。一方、日本の友人たちは討論中に私たち韓国サイドが考えることもできなかった点を指摘し、新しい視点を与えてくれました。また、日本経済の堅固さと、代替エネルギー分野での強さを感じました。このように、討論を通じ、前述したような3国の視点の相違を感じることができました。

他方で、中国が新しい強大国として急浮上し、日本もまた、世界経済と政治の分野で高い発言権を行使する国家であると考察した時、この2国間の互いに対する牽制が相当なものであるということを見ることができました。韓中日間の自由貿易は論理的かつ経済的観点から多くの利益をもたらすのは事実ではありますが、中国と日本、両国間の国際政治の力学関係によって、上記のことを達成するのは私が考えているよりも困難であると感じました。これはまた、これから共通の目標の推進のために私たちが何を克服していかなければならないかということを示唆してくれたことにもなります。

何よりも私たちの心に残ったものは、どんな国際的利害関係や経済論理でもなく、友人たちと共に過ごした6日間の温かい友情でした。国籍も言葉も私たちには大きな問題ではありませんでした。事実、5泊6日という短い期間でここまで深く友情を深めることができるとは思いませんでした。旅立つ日、私たちは涙を流しながら、真の友情の力というものがあるかを感じることができました。



韓国の学生の家でホームステイする日本の学生達
(右から二人目が金子さん、右端は谷川君)

《スイス・コー世界大会レポート》

去る7月5日から8月19日まで、スイス・コーでIC世界大会が開催されました。「コミュニティーのあり方」を始め、「経済」、「文明間の対話」、「世代間の対話」そして「人間の安全」等をテーマとする6つの会議が開かれました。会議の参加者からの報告と会議の中で行われた講演の一つをご紹介します。

～グローバル先住民族対話会議に参加して～

和田 マリアンネ（英語教師）

8月にスイスのコーで開催された「グローバル先住民族対話会議」に今回初めて参加しました。札幌在住のアイヌの女性お二人と、千葉県在住のアイヌの女性お一人、そして、クリエイターズ・オブ・ピースのグループが2001年よりアイヌの方々とかかわりを持つきっかけを作ってくれた上沼美由紀さんとの計5人で、スイス・コーとイギリスへ行ってきました。

「グローバル先住民族対話会議」は、「変革のツール」(Tools of Change)の会議と平行して行なわれましたが、想像していた規模より小さく、先住民族の方々は、フィンランドのサミー、カナダのファースト・ネーションズ（以前はインディアンと呼ばれていましたが現在では自分たちをこう呼んでいます）、オーストラリアのアボリジニ、オーストラリア在住のインド・ナガ族、そしてアイヌの方々と、総勢約15名程でした。日本からの参加者は、先住民族のコミュニティー・グループで毎日90分程意見交換をしたり、共にキッチンで料理の仕込をお手伝いしたりしました。コミュニティー・グループでは、毎日テーマに沿って、それぞれの思いを語り合いました。このコミュニティー・グループでは、カナダのファースト・ネーションズの人々のしきたりになって、トーキング・スティック（話の棒）を手にしている人だけが話しができ、周りの人たちは聞き手になるという方法を取りました。これによって話し手は他の人に中断されることなく安心して話ことができました。

午後には、参加者それぞれが10のワークショップの中から1つを選び、参加するという時間がありました。日本からの参加者は全員一緒にクリエイターズ・オブ・ピース主催の「ピース・サークル」に参加しました。このワークショップは女性向けに作られており、女性の立場から“偏見や憎しみの悪循環をどのように断ち切ることができるか、それぞれのできることを探っていこう”というものでした。ゲームをしたり、深い思いを共有したりし、15名程の参加者たちは、ワークショップの終わる頃にはすっかり仲良くなりましたし、アイヌの方々のお話を聞いて頂く良い機会ともなりました。

また、前国連事務総長のコフィ・アナン氏が、コー・マウンテンハウスを訪れ、ゲストとして全体会議でお話されました。“国連先住民族の日”が丁度この会議中に当たりましたので、その晩、先住民族の人たちの様々なパフォーマンスがありました。アイヌの方々、アイヌの楽器ムックリを披露したり、子どもの遊び歌をしたり、大きな集まりがあったときに踊る“輪の踊り”を他の参加者と共に大きな輪になって踊りました。文化や習慣を異にする皆の心がひとつになった瞬間でした。

アイヌの方々には慣れない場所と環境の中でも、とても一所懸命に理解しようと努めておられました。また、「自分たちはこれまでずっと差別されてきましたが、世界には色々大変な、嫌な思いをされてきた人たちが他にもたくさんいるのだということがよく分かりました」との感想を述べられました。



コミュニティーグループの仲間と
キッチンで共に働く



ティーンエイジャーの若者との交流会で
アイヌの楽器ムックリの演奏法を教える



クリエイターズ・オブ・ピース主催の
ワークショップ“ピース・サークル”の
仲間と共に

《スイス・コー世界大会での講演》 ～台湾における家庭再生への取り組み～

2007年8月に開かれたスイスのコーでの会議において、「心の奥深い癒し、そして生まれ変わる人生」(Deep Healing and Rebirth of Life) と題した講演が、台湾のリュウ・レンジョウ氏より行われました。そこでは講演者自身の経験をふまえた多くの事例が報告されました。

リュウ氏は、2001年にMRA/ICの青年国際研修プログラムである「アクション・フォー・ライフ」を発案し、その実施の責任者の一人となっています。また1993年からは効果的な親となるための研修

コースをスタートし、現在は家庭EQ（心の知能指数）発展協会と銘打って、ご夫妻で多くの若者や若い親たちの教育に携わっています。

以下に研修活動の中で体験した親子関係の修復に関する手法を論じています。特に幼少期の親子関係については、親の気づかないうちに受けた子供の心の深い傷を癒すことによって、人は人生を新しく甦らせることができること、そしてその手法について具体的に説いています。彼の活動を、コーでの講演を通してご紹介します。

心の奥深い癒し、そして生まれ変わる人生 (Deep Healing and Rebirth of Life)

人生においては、多くの人々が様々な悲劇的な問題に遭遇するものです。例えば、不幸な結婚や家庭崩壊、達成されない夢、または健康障害などなど…。人生は、大変な痛みを伴いそして傷つきやすく、絶望を伴うものです。

すると人々の心に「どうして私の人生はこうなるのか？ どうやったらここから抜け出せるのだろうか？」という疑問が湧いてきます。私はこの30年もの間そのような人々を気遣い、彼らが自らの人生

リュウ・レンジョウ

(劉 仁州、台湾家庭EQ 発展協会理事長)

を変えるお手伝いをしてきました。この任務を成し遂げるために私はこの10年以上自己啓発のプログラムを実施してきました。その目的は個々の人生への挑戦に打ち克つことを可能にするために励ますことです。その結果、本当に多くの人々の人生に起った勇氣ある変化や癒しを目の当たりにしてきました。最近になって私はもっとはっきりと、より早くより深く人生の変化を導く方法を見出しました。それを“決定的な場面での適切な表現”と呼ぶことに



リュウ・レンジョウ(劉仁州)氏

しましょう。

人間の幸福とは

人間の幸福とは、その人の自分自身への自尊心に直接関わりがあると思われれます。自分自身に高い評価を持てる人は、その人の性格に前向きな要素を多く持っていると思われるのです。例えば、楽観主義、動機付け、感性、内省、成熟、困難に立ち向う勇気、問題解決能力など、ごく一部を列挙してみました。このような人は人生をより幸福に感じる事ができるはずですが、しかし、その反対に自分を低く評価してしまう人は、自ずから喜びの感情や満足や幸福感が抜け落ちていってしまうのです。

人間の自尊心というものが作られる明確な要素の一つは、その人が生まれ落ちてから最初に育てられる時の状況にあります。往々にして両親の生きている人生の質やその周辺環境に関係してくるのです。

両親の自尊心が低い場合、ともすれば批判的になり、彼らの子供達の行動を左右したり制限したりします。そして子供達の感情や必要性を無視してしまうでしょう。さらに大人の価値観や大人の行動基準に完全に従うことを求めるでしょう。このような両親に育てられた子供は、おそらく、礼儀正しく大人しく従順です。そして学校でも成績が良いでしょう。しかしその子供の行動の規範はぼんやりとしていたり、または歪められたりするのです。このような子供は、成長過程で横暴で自己中心になりやすいのです。

またそれとは反対に、強い劣等感のゆえに、他人を喜ばせることだけに満足を見出すようになります。どちらの場合も自分自身を非常に低く見えています。

幼少期の家庭環境

幼年期の初期に子供は耐えがたい圧迫や両親への服従ということに対して順応するようになります。そして両親の期待を満たすように我慢することを覚えるでしょう。その結果、その子供が持っている才能や能力が往々にして封じ込められてしまいます。そしてその人の人生は力を失い、大人になっても疑いなく惨めなものになるのです。

もし人生の中でも早い段階で価値観や尊厳や権利に対して自分の考えや願望を率直に話す機会を持つことができ、両親と根気強く、口論せず対等にコミュニケーションをとる術を身につけられていたなら、その人のその後の人生は大きく変わっていたに違いありません。

私達は人生をもう一度やり直すことはできません。しかし、それまで持っていた過去の認識や判断を変えることはできます。その結果、長いこと封じ込められていたエネルギーや才能を解き放して自由になれるのです。そのことを可能にする、とても簡単で有効な方法に行き当たりました。それは、両親に手紙を書くことです。

両親への手紙

この手紙というのは、相手をとがめたり、非難したり、批判したりするものではなく、ただ自分の落ち込んだ感情や、満たされなかった要求を表すためのものです。

私達には皆、少なからず子供時代に忘れられない出来事があるでしょう。その場面の一つひとつを思い浮かべると、あまり幸せではなかった場面の記憶がよみがえり、心が痛むかもしれません。また、もしかすると落ち込んだり、恥じたり、怒りがこみ上げたり、恐怖に襲われたりするかもしれません。私達が幼かった頃、話す機会がなかったり、両親に話をするような勇気がなかったりした、そのような出来事です。

今、我々が大人になって他人を思いやると同時に自分を大切にするというそのバランスがとれるの

は、自分自身を低く評価することなく、どのようにしたら丁寧に話ができるかを心得ているからなのでしょう。

両親にこのような手紙を書くことによって、つまり、今からずっと前の、自分が子供だった頃に言うべきだった言葉を口に出すことが自分自身を助けることになるのです。

その手紙を実際に投函する必要はありません。ただ単にしまって置けばいいのです。両親それぞれに5通の手紙を書くことをお勧めします。そして一つひとつの手紙は、2、3日の間隔で1回約40分から60分かけることをお勧めします。そして、その手紙を書き終わった時、それを信頼できる人に話して下さい。おそらくそれは、配偶者であったり、もう大きくなった娘や息子であったり、親友かもしれません。誰とでも構いませんが、あなたが信頼していて、またそれを話した時、適切な意見を返してくれると思う人に手紙を読んで聞かせてください。

これらの10通の手紙を書いた後に自分自身を見

つめて下さい。“どうですか？良い気分ですか？あなたの個人的な関係は良くなったのでしょうか？”もし有効な進展があると思えたら、両親への手紙をさらに数週間の間隔を置いて2ヶ月間書き続けて下さい。そうすると、すぐに自分自身の体にエネルギーが充満するのを感じるでしょう。そのエネルギーこそがあなたの人生を彩り、豊かで喜びに満ちたものに導き、力づけてくれます。そして、あなたが生きていく人生すべてにより影響を及ぼすような能力を授かるでしょう。

あなたが思い出したことに、惨めになるのではなく、それを関心のある人に話をしてみてください。

下記の3つの手紙は、アダルトチルドレンが両親へ書いた実際の手紙からの抜粋です。

(註：日本アダルトチルドレン協会 (JACA) によると、アダルトチルドレンとは一般に、機能不全家族の中で成長した大人のことを指すことば。)

〈手紙1〉 親愛なるお母さんへ

たった今気づいたのですが、私の中に激しい怒りを抱えています…。

私がまだ小さい頃、あなたは私が怒りを爆発させることを許してくれませんでした。あなたは常に「子供は、癩癩を起こしてはいけない」と言いました。いつも私はドアの裏側ですすり泣くだけでした。長い間私は従わなかったり、悪いことをしたり、間違っただけのために罰を受けたのだと信じていました。でもそうではなかったと今、悟りました。本当に悪いことをしたかどうかに関係なく私は身体的な虐待を受けていたのだということ。

お母さん、あなたは多くの出来事について、もう忘れてしまっているでしょう。でもその出来事はまだ私の記憶の中に残っています。お母さん、私はあなたが一所懸命私

を育ててくれたことを理解しています。お母さんがお父さんとの不幸な結婚によって、大変な悩みや苦しみの真っ只中にいながらも、私を無事に育ててくれたことも解ります。また、お祖母ちゃんとの関係で多くのストレスを抱えていたことも。

あなたの両親は、あなたを面倒見ることができなかったけれど、あなたは私をしっかり守ってくれました。お母さん、私があなたに言いたいのは、このように痛みを伴った小さい出来事が傷つきやすい小さな子供に起きたことを知ってもらいたいということです。私がなぜこんなことをするかというと、この手紙を書くことによって、私の中の小さな子供を自由にしてあげたい為なのです。

〈手紙2〉

親愛なるお父さんへ

私は自分がまだ小さく成長期にあった時、大変な恐怖に苛まれていました。なぜなら、あなたはいつも私を急がせたからです。「早く来い！電車に乗り遅れる」とか「早くしろ！さもないと、お前の先生が・・・」といった具合にです。

いつもあなたにせかされて行動していましたが、まだ時間が十分あるのにと不満に思い、嫌な気持ちでした。

そうしているうちに、自分の生活をコントロールするために癩癩を起こすようになりました。あたかもいつも時間に追われているかのように感じるようになりました。何かをまだ始めている時から、次の事を心配するようになり、常にまだよく出来ていないのではないかと、何か忘れていやしないかと怖れるようになりました。

今、母親となって、自分がお父さんと全く同じことを息子に対してしていることに気づきました。「早く早く、遅れてしまうわよ・・・もうずっと待っているのよ！」というふうに。お父さん、私はこのことに気づいて良かったと思います。私はお父さんにただ言いたいだけなのです。「私はもう充分大人になりました。そして自分の人生や自分の周囲に責任を持つことができるまでに成長しました。ですから私を急がせる必要はもうありませんよ」。

〈手紙3〉

親愛なるお母さんへ

私がまだ小さかった頃、お母さんとお父さんと一緒に公園へ行くのが嫌でした。公園へは遊びに行ったのではなく、暗い木の裏側であなたが離婚の話をしているのをずっと聞いていたのです。お父さんは、いつもあなたに返事をしようとしませんでした。私は公園に行く度に、私達はもう一つの家族として家へ帰れないのではないかと恐れていたのです。

お母さんがお父さんと激しい口論をしたあの夜のことをいまだに憶えています。お父さんが来て、「心配しないでベッドに入りなさい」と言ってくれるまで私は一晩中独りで階段の所でうずくまっていました。悲しみでいっぱいでした。

私は混乱していました。なぜ、お互いに納得して結婚したのに今はあのように憎しみ合うのだろうか。なぜ私達をこの世に送りだしたのに家庭を壊そうとするのだろうか。その時から、この問いを解決するにはいずれこの家を離れなければと思いました。そして遂に私は家を出ました。今、私の結婚に対する考え方がお父さんやお母さんの影響を深く受けていることに気づきました。

◇◇◇ IC ニュース ◇◇◇

海外

■ オーストラリア IC “青年の生き方”

メルボルンにある IC 研修センターで“若者の生きる上での問題”について 16 の異なる文化圏から 22 名の青年たちが集まり話し合いが行われました。9 日間のこの宿泊研修で彼らは、自分探しや人生の方向について考えること、また人と人との結びつきについて、正直に過去を見つめることなどを経験しました。それが将来の和解や許しにとって重要であること、世界の重要な宗教の考えとも共通性があることを理解しました。

さらに仕事上の衝突などの解決策や地域社会のネットワーク、チームの作り方などを学びました。フィジーの青年は、「自分の中の恐れを乗り越えることができました。衝突を解決するための術を身につけました。最も大切だと思ったのは、静かに内省することが精神的な成長をもたらし、ものごとの意味や方向を見つける方法であると理解できたことです」と語りました。

■ アジア太平洋青年会議 (APYC-Asia Pacific Youth Conference)

第 13 回 APYC が、7 月 20 日から 28 日までフィリピンのバガディアン市で開催されました。地域の経済界やロータリークラブや地方政府の支援を得て、11 カ国から 60 名の青年たちが集まりました。出席者は、花々で迎えられ、子供たちが沿道に並び国旗を振り、マーチングバンドが歓迎の演奏をしました。テーマは、“自分から変わろう、今の私たちの在り方が未来を変えていく”でした。大会では、参加者自らの生活を改革すること、また地域や家庭で自分の信念や価値観に基づいて生きることが掲げられました。あるフィジーの青年は、「色々な問題をただ批判するばかりでいるのをやめ、解決をもたらしていくよう自分が努力します」と宣言し、またインドネシアの教師は、「若い人の間に無気力な風潮が蔓延していますが、先ず自分の生徒たちから変えていきたいと思います」と語りました。

国内

■ IC 交流会「国境を越えた新しい出会いの喜び」

世田谷の IC ハウスにて、去る 10 月 6 日（土）に「国境を越えた新しい出会いの喜び」というテーマで交流会が開催されました。第 4 回日中韓ユースフォーラムの参加者 4 名の報告者は皆、韓国や中国に多くの友人を得た喜びやこれからの交流の促進について熱く語り、報告を聴いていた他の出席者にも希望を与えてくれました。また、昨年のフォーラムの参加者の一人は、今夏フィリピンでの植林プロジェクトで学んだことを話してくれました。さらに中国からの留学生は、「今春来日した際 IC ハウスを訪れ、IC の人々と触れ合うことでホームシックが癒された」と話してくれました。

■ 第 11 回 日本ミニ HOHO 開催「出会い、ふれ合い、学び合い」

去る 10 月 27 日（土）から 28 日（日）まで箱根の富士箱根ゲストハウスで、第 11

回 日本ミニ HOHO が開催されました。①ストーリーテリングと傾聴、②「静かな時間」、③講演の3つの柱を基本に、「自らの人生を振り返って一生きる力の源となってきたもの」というテーマでそれぞれの人生を振り返り、夢や希望を語り合いました。講演では、「国際観光の最前線一年間世界50ヶ国5千人のゲストを迎えて」というタイトルで、富士箱根ゲストハウス代表の高橋正美氏にお話をして頂きましたが、お話の中に真の国際交流の姿を見ることができました。温かいホスピタリティーに包まれて、22名の参加者は、家族のような絆を築くことができました。

■『榊 多嘉子 愛と闘いの日々』出版される

(島田善生著、日刊工業新聞社刊、本体価格2,000円)

当協会の副会長を務める榊 多嘉子氏の伝記が出版されました。旧国鉄初代婦人部長として、また社会党所属の浦和市議会議員、埼玉県議会議員としての活躍、さらにはMRA(現IC)との出会いによりその精神を活かし、日中友好のかけ橋としての役目を果たし、多くの中国の方から日本の母と呼ばれるなど、その献身の人生が紹介された本です。米寿を迎えられ、「曲がったことは絶対に許さず、一本の筋を貫く」人生を生きてこられた榊氏のいきざまが余すところなく語られています。

***** 入会のご案内 *****

IC (Initiatives of Change イニシアティブズ・オブ・チェンジ、前身はMoral Re-Armament(MRA)) は、1938年にロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分や自国から変わるべきである」という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な絶対基準(正直、純潔、無私、愛)にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当社団法人国際IC日本協会では、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等内外で様々な事業を行っています。ご入会された方には、各種行事の案内を行う他、機関紙等をお送りいたします。ご入会を心よりお待ちしております。

***** 編集後記 *****

今号は8月に開催した日中韓ユースフォーラムと7・8月のコー会議の様子を中心に報告させて頂きました。会議は来年も開催される予定ですので、ご関心のある方はIC事務局までご連絡ください。尚、本機関誌に関してご意見等がございましたら、(社)国際IC日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

編集企画委員：高橋久子、中嶋邦子、長野清志 翻訳協力：尹明愛 編集担当：海老原真美